



発行日 = 2002年10月25日 発行人 = 面出薫 編集 = 田沼彩子・早川亜紀
照明探偵団・事務局 〒150-0001 東京都渋谷区神宮前5-28-10 ライティングプランナーズアソシエーツ内 (田沼彩子)
TEL : 03-5469-1022 FAX : 03-5469-1023 e-mail=tanteidan@lighting.co.jp http://www.lighting.co.jp/tanteidan/

照明探偵団通信

vol.14 Shomei Tanteidan Tsu-shin

海外調査レポート1

「窓あかりを探し求めて」
～サンフランシスコ～

海外展示会レポート1

「ライトフェアー 2002」
～サンフランシスコ～

海外展示会レポート2

「PLASA 2002」
～ロンドン～

海外調査レポート2

「照明探偵団 in London」
～サンフランシスコ～

国内調査レポート

「五箇山合掌造り民家生活」
～富山県・五箇山～

照明探偵団倶楽部活動1

街歩き報告
(横浜大さん橋 + 赤レンガ倉庫)

照明探偵団倶楽部活動2

研究会サロン報告

“Eyes in TOKYO”

～新宿・歌舞伎町～

面出の探偵ノート

照明探偵団日記



サンフランシスコ・アラモスクエア

「窓あかり」を探し求めて

San Francisco, U.S.A 2002/06/02-06

森 秀人 + 田中 謙太郎

機能主義のために明け方まで照らしつづけている都市の光と安らぐことを求めた住宅の光は、相反する性格を持つ。今回はその安らぎを感じるであろう光を少しでも垣間見る為に、住宅の窓あかりを探し求めた。



1. 高級住宅のあかりは多く点灯していた
2. あやしいカーテン越しのあかり
3. スタンドなどの間接照明が多かった
4. ホットとさせるエントランスのあかり



■ 灯らない窓

暑いのか寒いかわからない6月初旬、まずは探偵の基本である足で街を歩き周り、ほのかに光る窓あかりと煌々と輝く都市の光を観察できる場所を探した。地図で見るとたいした距離でないのに、さすが坂の街サンフランシスコ、足が棒になった。

ここは中心部から40分ばかり歩いた住宅地の小高い丘、アラモスクエアというところである。そこにはビクトリア様式の住宅が建ち並び、背後にはサンフランシスコ市内の摩天楼が見える絶好のポイントである。日没の近い8時30分ごろようやくこの場所にたどり着くことができた。

カメラを構え待つこと40分、薄暮の空に煌々ときらめく摩天楼が現れてきた。しかし、期待していた住宅の光は、数件の玄関灯と1つ

の窓あかりだけ。その窓もカーテンにより閉ざされており、中の状況はわからない。想像だけの長い時間だけが流れた。結局、気配も感じられなかった。

全て光が灯ることの方がおかしいと思いつつ、足早に次のポイントを捜し求め夜を徘徊したが、想像していたより、はるかに窓あかりが少ない。夜遅くまで遊んでいるのか、寝ているのか、空家なのか知る由もないが、明るい街路灯の光だけが目に付いた。

■ ボケた窓あかり

中高層のマンションが建ち並び、見慣れた景色を見つけた。白や電球色のぼらぼらな光が、外観を特徴付けている東京の景色と比べ、サンフランシスコは全て電球色でぼんやり見えて、何か物足りなさを感じた。

中が見える窓があった。そこには天井を照らすフロアースタンドが幾つかあるだけ。他の部屋を見ても、同じであった。東京のような照明器具が天井にないのである。スタンドの光だけで部屋全体をやさしく照らし出している。外から見ている我々には、照らされた天井だけが見えてる訳で、天井の照明器具がそのまま見えている東京の窓あかりより、ぼんやりしているのである。しかし、その窓あかりには、東京では感じられなかった光のこだわりが感じられた。

その後、2日間、電車、車などで窓あかりを捜し求めたが、最初の印象と同じだった。予想通り、光は電球色、スタンドを用いたぼんやり見える窓あかりが多かった。

Eyes in Tokyo 第2回

新宿・歌舞伎町

Khoo Wee Shen



外国人の目にトウキョウの街はどんな風に映っているのだろうか？ “Eyes in Tokyo” 第2回は人種のはつぽ新宿・歌舞伎町の街をシンガポールのShenに歩いてもらいました。妖しげなあかりに誘われて彼が見てきたものは何だったのか？？？



You must have heard a lot about this famous section of Tokyo, and quite likely everything you've heard is true.

Tokyo's infamous Red Light District, Kabukicho, has been servicing the personal needs and desires of locals and visitors for fifty years.

At dusk the neon lights come on, the barkers come out, and the salarymen come in en masse. There is a certain charm to the area thanks to the brightly coloured neon lights that tempt you to linger longer. Yes lights. Not sex. Truth to speak, the lights compliment the sex that is the trademark of this district. The lights reflect the tolerant attitudes towards prostitution, soft drugs and pornography and an acceptance that these things are human. More than that, that these things are business - great business indeed. Like the illuminated advertising billboards that line the façade of the buildings of 42nd Street in New York City, the neon lights at Kabukicho call out to the innocent passerby to wander into it's narrow but active streets and even into the “entertainment” establishments housed within its buildings. In fact, from a distance you almost do not see the buildings, just the neon lights. The image of Kabukicho, near or far, is almost always represented by

the image of the multi-coloured neon lights. With these bright neon signs, colours, crowds, hasslers and the smell of sex all over, the whole environment is one of almost complete chaos – perfect for a place like this.

In many ways Kabukicho is the very best and very worst of Tokyo. There are some thirty Yakuza gangs controlling the streets in and around Shinjuku, and especially in Kabukicho. The exploitation of women is rampant, and after three a.m. Kabukicho turns into a wasteland of nightlife leftovers. But remarkably, it is still safe. Even during the peak evening hours when an estimated half-million people make their way into Kabukicho there is an amazing collection of social and class diversity. Construction workers rub shoulders with salarymen and students in a carnival-like atmosphere free from animosity. Even the gangs have achieved a kind of social integration. Currently, the Chinese Mafia rule the streets of Kabukicho. The complexity of life on the street level is almost reflected by the complexity of lights above. From afar, Kabukicho stands out even amongst the bright lights of the neighbouring shopping hub. The intense, loud multi-coloured sea of neon seems to reflect the intensity of the activities and life that goes on within. Each neon sign blares out in its out colour,

brightness and rhythm but is hardly perceived alone. The multitude of these neon signs melt together to form a whole - a sea of lights that activates and forms a veil to the activities.

Yes these lights are indeed a veil to what goes on within – sex, food, entertainment and business. Despite the seeming chaos, there is a hidden structure to the place and it can be read in layers – lights, people, money. The lights appear as the outermost layer screaming, declaring the existence of this mega-entertainment hub. Then comes the people who gives life to this place – the barkers, prostitutes, bartenders, customers, pachinko players, students, gang members etc. And finally behind this lies the bottomline – money. At the end of the day the lights and the people exist in Kabukicho for one reason and that is Money.

(Khoo Wee Shen)

PLASA 2002

London, England 2002/09/08-11

窪田 麻里 + 田中 智香



1. 会場を2Fから見渡した
2. PLASA2002 アワードの展示エリア
3. 噴霧&プロジェクター・ミラースキャン
4. VARILITE. 大きいし、器具の機構が見えてすごい!
5. ライトテーブルのブース



毎年1回ロンドンで催される「PLASA」は、ちょうど今年で25周年を迎えた。オープニングに当たる8日にはロンドン入りできず、普段に増してイベント盛りだくさんであったろう会場の様子は残念ながら目にすることが出来なかったが、恒例のLJ（ライトジョッキー）などのイベントが行われにぎやかな幕開けとなったようだ。

このPLASA、“エンターテインメントテクノロジーショー”といった位置付けで、普段はなかなか間近で見ることの無い巨大なキセノンライトやムービングプロジェクターといった照明器具をメインに、噴霧器・噴煙器、ステージの鉄骨ユニット、はたまたクラブシーン無くては語れないロンドンのナイトライフには必須のDJ盤の数々、etc…、イベント関連プロダクト全般の展示会である。

今回、照明器具のジャンルで新開発商品として取り上げられていたものの1つが、Martin、CLAYPAKYなどのブースで展示されていた1200Wのムービングプロジェクター。ハイパワーの大きな灯体でいながらスムーズな首振りとかかなり抑えられたモーターのノイズ、従来の様々なゴボパターン、水・波のような自然のテクスチャー、レンズでの幾何学的模様のパリエーションに加え、このシリーズでは、モーター制御による内蔵バンドアで投影イメージのスムーズな変形が可能となったそうだ。

もう1つの目玉は、やはりLEDを使った製品である。こぶし2つ程の大きさのヘッドの小型プロジェクターや、リニアのLEDユニットが乳白アクリルチューブに入って発光し、連結して調光・カラーチェンジが自在に制御できる

ような製品、また巨大な網面にRGBのLEDの粒を一面につけたモニター等々、かなり輝度もしっかりしていて、従来の光源の一部を担える代替製品として着々と進化しているように見えた。LEDを光源とした室内ユースの小型ムービングプロジェクターがめまぐるしく動き、スピーカが割れそうなほどの大音響が溢れたあるブースでは、LEDを使った発光するドリンクテーブルなども製品化されていて、さすがは大人のナイトライフ文化がきちんと根ざしているお国柄、ビジネスにもちゃんと反映されているのだなあ、などと思いながらビデオをまわしていると、すっかりそのブースでバー・モードに入っていた（アルコールも入っていた？）お兄さんたちに手を振られ、ちょっぴり気恥ずかしくなってスタコラそのブースを後にしたのだった…。

第14回街歩き 2002年8月19日

横浜港大さん橋国際客船ターミナル+赤レンガ倉庫

■街歩きレポート・その1

話題の建築が次々オープンした横浜MM21地区。今回の街歩きでは、4月に文化・商業施設としてリニューアルオープンした赤レンガ倉庫と、6月に部分開業した国際客船ターミナルに行ってきました。当日は台風13号の影響で開催が危ぶまれた街歩きでしたが、幸い集合時には雨もおさまり一安心でした。

まず、最初に訪れたのは大さん橋国際客船ターミナル。この建築は、'95年の国際コンペで1等案として選出されたfoaの設計によるもので、柱や梁の無いその有機的形態が話題になりました。全長約430m、幅70mの巨大な施設が海に突き出すように延びて、波打つ床面は全てウッドデッキで覆われています。全体としては、まるで大きな空母が漂着しているような印象です。

さて、これだけ斬新なデザインの建築なのだから、その照明は…！と、期待して見に行ったのですが、その第一印象はまず暗い、ということ。ことに屋上広場は24時間開放されているのに、その明かりには約3mの「く」の字型のポール灯が設置されているのみで、閑散とした感じがしました。照度を計ってみると、ポール灯から離れた所で0.2~0.3ルクスと満月の夜の明るさほどでした。

■街歩きレポート・その2

あたりは静かだった。遠くで空がかすかに鳴っている。台風上陸予定だったこの日、照明探偵団は横浜港大さん橋国際客船ターミナルへ向かった。

ここは雑誌で何回も見ている。初めて目にした時には衝撃を受けたのを覚えている。だから夜の光景は一層楽しみだったのだが・・・アレ？蛍光灯がいたるところにバラバラとついているだけ。足元は真っ暗だ。あのダイナミックなウェーブ状のデッキ、そこから得られるシークエンスは演出されていないようだ。これはショック！この建築、夜は営業していないのかしら。にしては、蛍光灯に徹夜を強いられているような・・・パソコンじゃないけれど、スリープ機能をつけてあげたくなった。

残念ながら新しい光というのは見当たりませんが、特筆すべきは、その屋上広場からの眺めるMM21の夜景の美しさ。対岸の赤レンガ倉庫や横浜ベイブリッジなどのライトアップまで見えて、団員の皆さんも周囲の景色には目を奪われたようでした。

そして、大さん橋から徒歩にて赤レンガ倉庫へ。ここは1989年に倉庫としての使用が禁止された2棟が、1号館は文化施設、2号館は商業施設として再生されたものです。光の印象としては、建物の鉛直面がライトアップされているのみで、十分に明るく感じられました。ただ、団長からはアップライトしている床埋込みの器具のグレアがひどくて、段差を踏み外しそうになるとの意見も。それでも大さん橋とは対照的に、色温度がオレンジ系の暖色で構成されていて、なかなか居心地よく思えました。今ホットな横浜、まだ足を運ばれていない方は、ぜひ1度ご探訪あれ！
(井元純子)

海を少し隔てた向こうには、横浜MM21の見事な夜景が広がる。ホテルが建ち並ぶ脇に、赤くポーッと光る塊が見えた。赤レンガ倉庫だ。歩く事15分、倉庫前に近付くと威圧とも言える、そのどっしりした構えに足が止まった。歴史を感じさせるのは、下方からの強いライトアップのせいかしら。シンボリックに映っている。しかし一つ残念な点があるとすれば、それは昼間と似通ったイメージな事だ。レンガ色に近いオレンジ色で統一している。心地よい裏切りを夜にはつい期待してしまう。先程の大さん橋をこちらから眺めると、白い点が集合し、これも一つの塊に見える。距離をおくと、建築は構造体から、やがて生物の魂のようなあかりに姿を変



1. 横浜MM21の夜景に見とれる団員たち
2. 赤レンガ倉庫のライトアップ
3. 両側に見えるのが赤レンガ倉庫1・2号館。
中央は大さん橋

横浜MM21地区の夜景が、私はとても好きだ。きれいな光は、人を迎えてくれていく気がするから。こんなあかりが、私の住むまちにも静かに息づくといいな、帰り道にふとそう思った。雨が降り出した。
(加藤直子)



内部の折板構造をライトアップしているスポットライト

五箇山合掌造り民家生活

富山県・五箇山 2002/09/12-16

面出 薫 + 田中 謙太郎

私達、日本人の生活の中に電気による人工照明が入り60年が経つ。今ではありとあらゆるものが人工照明で照らし出され、非常に明るい環境の中で生活をしている。その環境に慣れてしまい、本来の夜の暗さ(闇)などというものは全く忘れてしまっている。今回はそのような本当の闇を体験しながら自然照明(火の灯り)にこだわって調査を行った。



今回の調査は、都内ではなかなか体験することが出来なくなった闇の中での「火の灯り」の体験調査。合掌造家屋の「測量調査」などである。メンバーは、面出団長の教え子である武蔵野美術大学・空間演出学科の面出研究室の生徒たちと探偵団メンバーで合計18名である。富山県の五箇山にある合掌造の日本家屋「無名舎」に4泊5日で調査を行った。

東京から高速バスの班と自家用車の班に分かれ、朝9時頃出発し現地に到着したのは、夕方6時過ぎであった。最後の高速道路を降りる頃には、あたりは暗くなり闇に包まれていった。そこから幾つかのトンネルを越え、深い山間に立つ「無名舎」に到着した。3階建ての建物はその名の通り合

掌した手のような茅葺屋根に覆われ、長い年月を感じさせるすすのしみ込んだ深い色で僕らを迎えてくれた。土間に入り履物を脱いで居間へ進むと中央には、いろりがある。そのいろりの上には灰の巻上げ防止や熱を効率よく居間全体に行き渡らせるための囲いのようなものがあり、まったく昔話に出てくる風景そのままである。

実測を主体に行ったのは2日目である。合掌造の構造や寸法を計測した。それと共に障子越しに入ってくる自然光の計測も行い、外部で地面などに反射し、それらが障子によって拡散し室内に入り込む様子を計測した。建物は大きく3つのパートに分かれる。土間+炊事場、居間、居室といった

順になるのだが、中央の居間は一番天井が高く5.5m程。奥の居室は2.2m程の天井高で、上部に天井高さ1.2mほどの2階がある。茅葺屋根が壁となる3階はそれらの上で最高天井高さが2.2m程である。この3階は主に養蚕で使用されていた。全ての部屋は日の入る開口部は少なく、仕切りは障子のみ。そこから入り込む自然光は、下方向だけでなく上方にもやわらかい光を運んでいる。また自然光で発光した障子は室内側から見ても明るさ感のある面として存在していた。夜には、囲炉裏に火を灯しそれによる照度も測定した。

やはり火であるからなじみのある蛍光灯と比較するのはばかばかしいのだが、現代の住居の居間が暗い方で50~150ルクスに